
お茶の間勇者。

キラワケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お茶の間勇者。

【Nコード】

N6032Q

【作者名】

キラワケ

【あらすじ】

勇者イノウエタケル。俗に言われる”チート勇者”依頼は殆ど成功に終わり、剣と体術のみで勇者最高レベル一〇〇まで僅か数年で上り詰める。依頼報酬は溜まりにたまって三〇〇〇〇〇〇〇〇G。しかし、自発性ゼロ、行動力僅か。移動式お茶の間で必要以上に体を動かすことは無い。そんなやる気のないチート勇者をとりまくファンタジーコメディ？

0話 勇者、睡眠を欲する。

勇者イノウエタケル。年齢二十歳・伴侶無し。

勇者歴十五年・日本大勇者コンテスト十連覇、依頼達成率九七%、勇者レベル・一〇〇と殿堂入りナンバー五三三。

攻撃力五〇〇〇〇（参考、レベル一勇者”攻撃力一”） 防御力六〇七〇〇〇（参考、レベル一勇者”防御力一”）

主要武器。リズムソード・勇者種別” 剣術特化”、所属ギルド”
イノウエファミリイ”

出身地”ニホン国カナガワ地区”総移動距離、約一〇〇〇〇〇〇〇
 ○キロメートル、所持金三〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 として三億円ぐらい)

しかし、自発性〇。行動力三〇（参考、レベル一勇者”行動力二〇〇〇”）

滞在・移動式お茶の間、趣味・のんびり、好きな物・日向、嫌
い物・喧騒。

これは、やる気のないチート勇者をとりまく物語。

「お茶の間勇者
ーイノウエタケルー」

ピピピピピ、朝からけたたましい機械音が耳元で鳴り響く。

朝を知らせ、目を覚ませる睡眠妨害装置が俺の枕元では鳴っている。

かつてならその装置を右腕で払い除け、今眠るベッドから追いだ

すのだがそうもいかない。

しかしまだ俺の体や脳は大量の睡眠を欲していて、布団の中で夢世界に浸りたいところである。

それは叶わず、耳元で鳴る睡眠妨害装置は次第に音量を上げ、近所迷惑さながらまでの妨害行動へと進展する。

まあ、近所と言っても近所という定義が今の俺の状況にはないわけだが。

しかしだ、その装置を整備・設置した当の本人がそろそろ意外にも強情な俺に腹を立ててやって来る頃だった。

「おにーちゃん、いつまで寝てるの！」

諸悪の根源とも、朝の起床時に限れば絶対的悪となる。

「いくら凄い勇者だからって、寝坊はダメだよ！」

凄い勇者。俺はそんな自覚ないのだが、妹含め周りは口をそろえて言うのだ。

タケルは凄い勇者だ、と。正直持ち上げられてうれしくない訳ではないがそこまでか、と聞かれるとそうでもない気もする。

なにせ”魔王”を倒したのは俺に限った話じゃない。前例ならいくらでもある、ただ俺はそれが早かっただけに過ぎない。

「俺は凄い勇者じゃなくていいから、あと五時間と三十五分七十秒寝かしてくれ」

眠らせてくれるなら、凄くなんてなくていい。俺は現在の幸せを探求させてもらう、そして今の睡眠時間こそ俺の幸せだ。

「だ、だめに決まってるでしょ！ そんなこと言ったら殺されるからっ」

そもそもなんだこの世界は。悪魔やら幽霊やら怪物やら魔王やらが”もうひとつの世界”からこんにちはしたせいで良い迷惑だ。

小さいころからオヤジに死ぬ思い……死ぬ間際の特訓を強いられて、六歳で魔王討伐に向かわせるとか意味わからねえよ。

魔王って言うത്パーティなら三ヶタ、ギルドなら二ヶタは必要なのに、俺と数人のギルドメンバーだけだもんな……あれはひどい。腕とか千切れまくった、治癒魔法なかったら三ヶタ死んでた。

たまたま魔王の急所に俺の”プリズムソード”が刺さっただけで、俺はただ死にまくっただけなのにさあ、その後は祭り上げられて、依頼こなされて散々だった。

勇者歴十五年越え記念で、ようやくギルドのフリーメンバーに成り晴れて自由の身だったのに……こいつは。

「ギリ、いい加減にしてくれ。俺は眠いんだ、寝かしてくれ、頼む」

「いくらお兄ちゃんの頼みでもそれは聞けないわ……」

「そこをなんとか」

「だって……だって……もう三〇時間も寝てるじゃないの！」

そんなにしか寝てなかったっけ？ いやあ幼少期は徹夜依頼が多すぎて、今頃体は睡眠を欲しているようだ。

寝ても寝ても眠気がとれない。運よくスッキリする日もあるが、大半はダルダルでベッドインである。

「じゃあ後二〇時間は余裕……」

「じゃないわよ！ おきなさーい」

「ZZZ」

「このバカ兄はあ！ ……いいよ、わかったよお兄ちゃん。お兄ち

やんがそのつもりだったら、私にも考えがあるよ」

ちなみにそんなことは聞かず寝息を立てるタケル。その傍では杖を持った彼女が長い髪のを逆立たせて、バチバチと電気を弾けさせているというのに。

「この世に満ちるモノよ我に力を授けたまえ」アン・ペティット・タイラント”っ」

その時勇者の移動式お茶の間に電気が走り、当の勇者は香ばしい匂い漂う黒焼きになっていた。

1話 勇者、と魔法使い（見習い）。

”十字斬り” いー」

「ぐわあああああああああああ」

どーも、タケルです。男です、二十歳越えても女はいません。でも一応勇者です。

今何しているかと言えば――

「ぐ、ぐぐ……一発だ、と……!？」

襲撃してきた盗賊を返り討ちにしてやった。ただそれだけのこと。ちなみに返り討ちに遭った盗賊の男は、泡を吹いて地面でもがいている。

「……てことで、俺行っていーかな？」

「ふふふ、俺の甘く見るなよ。俺様のギルドには俺よりもずっと強い奴が沢山――」

泡吹いてるのに喋るなんて器用だなお前。そんな盗賊の与太話を聞いててもなんの得も無いので早々に立ち去ることとする。

「あ、まで！ て――」

”地面直下”」

「は、はなんだそれ地面に剣さしただけでぐぶううううう!？」

五月蠅いので黙らせた。言っ飛ばせばここまでの一連の動作、盗賊を返り討ちにすることなんて造作も無いことだ。

レベル上げやら、金目当てか知らないが……俺を狙っては返り討

ち。もはや日常茶飯事のことだった。

「あー……出てきていいぞ」

白目を向いて気絶している盗賊男をしり目に、近くの人一人がしやがんで隠れられるであろう手頃な岩石に声をかける。

「お兄ちゃんありがと……って、相変わらず瞬殺だね」

「殺してはねえから」

「圧勝的な意味でだよ」

「……俺は正直戦いたくないんだけどなー」

その理由が人を傷つけない「なんて偽善者丸出しという訳ではなく、単に「面倒臭い」だけである。

やっとギルドの拘束から解かれたのに……まあ拘束時代よりはまだマシなんだろうけども。

そして、のんびりまったり一人旅が出来るかと思ったら――

「お兄ちゃん……それは勇者の発言としてどうなの？」

こいつ……妹が金魚のフンのように付いてくるハメになった。

「私は勇者じゃなくて魔法使いだけど……って正確には魔法使い見習いだけど。それでも！ お兄ちゃんの勇者としての自覚は足りないんじゃないかなあ？」

魔法使い見習い。それ故に見習いを卒業した「勇者」にくつついて現地で修行する、ギルドの方針でそう決められている以上逆らえない。

ちなみにギルドの方針に逆らうと見つかり次第、判断され次第拷

問である。それも死ぬ直前まで追いつめられる最悪鬼畜のレベルで。

「……見習いじゃなくなりたいなら、さっさと実戦経験積みよ。俺ばっかに任せて、面倒なんだよな。いちいち相手するの」

「いやいやいや！ お兄ちゃんに襲いかかるのは大体がレベルニケタ後半以上で必殺技持ちのハイレベルプレイヤーじゃん！ 無理だよ！ 殺す気？」

「そこら辺に茂ってる”命源草”でも飲んでけば大丈夫だろ」

「それには調合魔法必要だし、そもそも死んだ私がどうやって飲むのよ」

「まあ、根性？」

「お兄ちゃんはやってくれないんだね……」

「ああ、出来るかもしれないけど面倒だからな。だから死ぬなよ？ 兄に迷惑かけんなよ？」

「そこまで言うなんてひどい！ おにいちゃんの馬鹿！ 私だってそう簡単に死んでたまるか！ ……だからお兄ちゃんとグループ組んで、お兄ちゃんの得た経験値を私が貰う」

「グループ組んだ最初からそれやってるじゃねーか！ 楽して経験値貰えるとか良い御身分だなァ」

「お兄ちゃんの経験値マックスじゃん！ 勿体ないから私は貰ってるんだよ？ いわゆる有効活用なんだから！」

「威張るな、自分で戦え」

「戦ってるよ……野獣と」

「レベル一から三までの弱小ばっかだけだな」

「し、仕方ないでしょ！ そもそも私が”地上”に来たのなんて一か月前なんだよ！」

「はいはい、分かりましたー」

「あっー！ なによなによ、その反応！ 面倒くさいみたいになーっ！」

……一応こいつ妹です。正直五月蠅いです。

ギルドさえ無ければこんな妹と行動なんてしませんとも。見てく
れは悪くないのに、変に絡んで来るといふか……節介焼きというか。

まあ、そんな二人で旅してます。俺は勇者の大義名分こと「魔王
とかの害悪討伐」妹は「経験値積んで見習い卒業」

そうしてしばらく歩くと、岩だらけ土砂だらけの荒野の中で一つ
の町に辿りつく。どうやらそこでは市場が開かれているようで……
俺はなんとなく覗いてみることにした。

2話 勇者、お茶の間を買う。

「それなりに品揃えはいいのなー」

「わあー、凄い！^{かみなり}雷石も^{でん}電石もこんなにたくさん……それにあんまり高くない！」

一応解説しておく、魔法使いは魔法を使う。攻撃魔法や防御魔法を使う為には自然に溢れるものを利用しなければならない。

近くに水辺があり、例えば水使いならばその水を利用して”aqua stream”とか言う勢いづいた水流を相手にぶつけて攻撃手段にする。

しかし水辺がなければ水魔法ならば。空気中から取り出すが、空気を乾燥させてしまう上に取れる量も微小なので効率が悪い。

そこで登場するのが”石”で、魔法で各要素が圧縮され、水ならば掌サイズで五百ミリリットルペットボトル千本分にもなるというからあるに越したことはない。

時折自然に生成されるのを発見することもあるが大抵は誰かに取られてしまう以前に希少で、人工的に生成されることが多い。

それでも大量の要素を含み、生成には強力な魔法を要するので値はそれなりに張るが、持ち運びなど考えると効率はケタ違い――

ガラにもなく説明してしまったが、俺はその専門分野どころか魔法なんて使えない。

勇者は力と気と精神力と意地とかで出来ている。俺もそんなところで、一番アナログだ。

戦い方にもそれぞれあるのだ。そして俺が勇者で妹は魔法使いを目指している、と。

「うーん、どうしたものか」

そういえば携帯寝袋がもうボロボロで風通しが良くなりすぎてたっけか。

”過去の技術”で作られたその寝袋は人が余裕で入れる大きさだが持ち運び時には鶏の卵一つ分に満たないほどに圧縮される。

ギルド時代からお世話になっていることも有り相当にガタが来ている。

「まあ買い代えるとすっかな」

ヨレヨレのデニム柄ジャケット（注・勇者の服装はかなりラフなもの）から一枚のカードを取り出す。

それが”ゴールドカード”で過去に存在した電子マネーを模倣し、様々なコンピュータを通さずに独立させたもの。

ようするにゴールドカードはこの世界で過ごす者には結構に必要で、もちろん現金を持ち歩くことも出来るがいかんせん効率が悪い。盗賊や泥棒もこのカード狙いが殆どで、また別勇者やら魔法使いとの戦闘終了時に賭けをしていた場合は相手のカードに自分のカードをかざしてゴールドを受け取る。

時たま野獣がゴールドを持っていることや誰かが現金落とす（滅多にない）、それを貰って各それぞれの町でゴールドカードにチャージしてもらうことも可能だ。

そんなシステムで俺のゴールドカードには三十億と三千万ゴールドが貯まっており、これも魔王討伐時に発見する財宝を売ったり報酬を受け取ったりしている内に貯まったものだ。

基本的に薬草やら食糧を買うだけで追加装備も殆どしないのでゴールドは貯まって行く一方だ。

贅沢しても良いと誰もいうが、俺はそういうのに興味がなく。無理して使う意味もないと踏んだからだ。

「どーしてもんかね」

寝袋はここならどこで売っているかなー、と探していると近くから野太い掛け声が聞こえてきた。

『掘り出し物市、始まるよー』

掘り出し物ねえ……確かに掘り出し物市はそれぞれの町で時折やっているが確かに掘り出し物で、言葉通りに掘り起こして見つけた代物も結構にある。

例えば”過去の技術”の内でおそらく娯楽用として使用されたであろう、今ではあまりにも前時代的な液晶二画面のゲーム機などが売りに出されマニアに買われる。

もう幾百年以上も前の骨董品で、その無駄なスタイルがそそるんだあとギルドのメンバーの一人が力説していたのを思い出す。

しかし暇で、どうせ寝袋も買えることだろうし、でぼーっとしながら売りに出されるものを見て行く。その中で。

『お次は大物——移動式住宅だあー』

おおー、と辺りが沸いた。そして俺もおお、と呟いた。

『太陽電池も風力発電も火力発電も完全装備！ それにお日様サンサン照らない雲ばかりの日でも！ ”悠久の陽だまり”がかかっているので十二分に発電してくれます！ それでも足りなかったら風力も火力も動かしちゃって下さい！』

すげえな、デザインよりも機能美追求してるってか。

そう辺りで話し合う。俺もそれが気になってきた。

『中には寝室にキッチンにダイニングにバスにトイレも完備しました！ もちろん全てが独立していてプライバシーも安全保障！』

やっべえ住みてえ、俺もこの世界に来てからはそんなゆったり過ごしたことなくないぞ。欲しいなあ。

俺もそれに心動かされていく、かなり魅力的だ。

『内装はコチラ！ キッチンダイニングはこちら！ ここでお料理して隣のリビング……というより茶の間ですね！ そこでゆったり過ごせます』

そこで俺はある物体に気付いた。”過去の技術”の中でも極めて原始的ながらも、その魅力はどこかケタ違いな”それ”を。

『敵からの攻撃があっても大丈夫！ 防御力六〇〇〇〇〇の超防御仕様！ 安心の一時をお約束します』

すげえええええええええ、どんだけ固いんだよ！ 見た目に騙されちゃ駄目だな。防御特化でもレベル八〇は必要だろ！

『そして”有馬冒険家具”の放出在庫の為、残り一品！ お安くしからの三〇〇万ゴールドからのスタートですっ！』

ピーーと笛が鳴った。その途端にカードを上へとかざしてゴールドを提示していく。

「三五〇万！」 「いや三八〇万！」 「四八〇万っ」

最後の数字におおーと太っ腹ぁーと歓声が沸いた、そして俺も”

それ”目当てでカードを上げた。

「三〇〇〇万」

急激に静まりかえる会場で一人、カードを上げ続ける青年が居た。

「ゆ、勇者イノウエタケル様。お買い上げー」

そうして俺はお茶の間を買った。

3話 勇者、お茶の間を堪能する。

「ということでキリ、お茶の間買った！」

「えええええええええええええええええええええええ」

お茶の間、商品名「非固定式自動移動型居住空間」TYANO—
MA”」というもの。

外装こそそこら辺に打ちたててられそうなプレハブにしか見えな
いが、居住空間と題すだけあって室内は圧縮空間になっていて外見
の数倍は室内面積を有している。

中には寝室にキッチンにダイニングにバスにトイレも完備しているというまさに居住空間。

更に”悠久の陽だまり”という魔法がかけられていることで、半永久的な発電機関も装備しているのだ。

「えーと、お兄ちゃん？　でも、それお高いんでしょう」

「まあ三〇〇〇万Gぐらいかな」

キリが面白いように飛び上がった。何か飛行系の魔法を使ったのではないかと疑う程だった。

「さ、ササンゼンマン!？」

「実に良い買い物だった！」

「お兄ちゃん！ その三〇〇〇万Gどれだけの大金だと思ってるの！」

「よくわからん。うんまえ棒三十本分ぐらいか？」

「うんまえ棒三十万本ぐらいだよ！」

昔の通貨換算一円＝一〇Gらしい。うんまえ棒はギリ曰く一〇〇Gなので――

「おお、一生分」

”アンダー”で暮らしてたら、三年は遊んで暮らせるのに！」

「でも、嫌だから来たんだろ？ 地上に」

「まあ……そうだけど」

アンダーと呼ばれるのは地下世界のこと。地上の文明が消滅する手前に殆どの住民が地下世界に潜んだのだ。

地下世界ということもあって、制限も多く、ギルドに拘束されてでも抜け出したかった場所でもある。

――こんな話どうでも良かったんだった。

「でもこれすげえぞ、とりあえず入ってみようぜ」

「う、うん……買っちゃったもんね」

無駄遣いに思われたのだろうが、それは大きな間違いだ！

てか金は使わないで溜まる一方だからケチケチせんでもいいのに、未だに”アンダー”時代の癖――どーでもいいよな、すまん。

「わ、わぁ……」

「どーよ」

と言いつつも初めて入るのだった。

中は本当に外見の数倍は広く、俺とキリだけだと空間が大幅に余るほどで、目と鼻の先には個室への扉がいくつもある。

「広いし、小奇麗だし……べ、ベッドは！」

「あー」なになに個室は初期設定では二個まで設置されています。

ご希望に合わせて二十個まで追加設置できます”と……おおー、すげえな」

キリが買った当人の俺よりも興奮気味に個室を開けると、

「す、すごい良さそうなベッド！」

と言いだした途端にベッドへとダイブ。

乗っかっていた布団に包み込まれるように小柄なキリは、枕に頬ずり。

「こんな気持ちのいいベッド有ったんだ……」

光悦の表情を浮かべながら足をぱたおぱたと動かしながらふかふかのベッドを堪能していた。

どれどれともう一つの個室を開けて、ベッドに兄妹仲良くダイブ。

「おおー」

これだよ、これ。

いつもの野宿とかで背中痛かったし、町の宿屋のベッドは埃っぽくてギシギシ言うしで最悪だし”アンダー”に至っては固いカプセル……

「ぐー」

「お、お兄ちゃん寝るの早すぎだから！」

「お、おおー」

まだベッドを堪能しただけだった、とキリに起こされて気付く。自分の個室を見渡すと、そこには本棚のくつついた机があり、過去

の技術の中でも古い部類に入るテレビなど……魅力的なものばかりだった。

持っていた取り扱い説明書をもう一度眺める。

「このTYANO—MAは西暦二〇〇〇年最初期の茶の間の風景を忠実に再現したものです」

これは”過去の技術”を模してつくったものなのか！

「お買い上げ特典として——」

俺はその記述を見るなり、ベッドを飛び出した。

茶の間の四角いテーブルの脇にあるボタンをカチリと押した。すると——

「どしたのお兄ちゃん」

俺の後をついてきたキリが、ぼうつと眺める先では——テーブルの端から途端に毛布のような布が現れ地面に就くほどまでに伸びる。そしてそのテーブルの下から少しの範囲を正方形に薄い布団のようなものが敷かれ——

「これが伝説の”こたつ”……っ！」

「こたつ！？ 本当に実在したんだ」

すぐさま俺はこたつの中へと足を滑らせた。この探訪器具は古典的なものだがとてつもなく——

「ほっ」

心地が良い、ベッドの数倍早くに眠気が襲ってきそうだ。

「お兄ちゃんいくらなんでもおおげさ……ほっ」

向かい合うように兄弟がこたつに入った。

見かけはただの兄妹ですが、お二人は勇者と魔法使い（見習い）

さてさて移動式お茶の間を手に入れた、怠け者勇者としっかりものの魔法使い見習いはどのようなお話を繰り広げるのでしょうか？

4話 勇者、レトロコレクター。

「はぁ~~~~~」

現在、彼こと勇者イノウエタケルはコタツを堪能中。

タケルがコタツに入って天板に頬ずりするように顔を密着させてくつろいでいると、

「染み渡るわぁ」

「お兄ちゃん……ジジ臭いよぉ」

向かい側に妹ことキリがいてコタツの底面に敷かれたカーペットを布団のようにして上半身半分を外に出して、残りはコタツに亀が身を甲羅に隠すように入れていた。

「そう言う妹よ、それじゃ完全にコタツ女だぞー」

「いいもーん、コタツに寄生出来るなら何もいらないもーん」

「へえ、魔法使いの称号もいらないのか」

「…………お兄ちゃん？ それは、ちょっと」

焦るキリを楽しんでいると、卓上に置かれた携帯電話（ドコノのNe905iという市場で見つけた超古典機改造）の着信音が鳴った。

「お兄ちゃんの電話だよ」

「ああ……はい、もしもし井上です」

電話口に出てみると「よお、オレオレ」という声が。

これ系の詐欺が大昔に行われていたそうだけでも、この声に聴き

覚えがあつたようでタケルは名前と顔が一気に頭に浮かんだ。

「あー、マジで！ 久しぶりー、なにになに？ なんか勇者宅見つけたって？ おおー寄ってく？ 土産、なくても構わないってーで、あと三十分ね。おけおけ、じゃあ待ってるぞー」

「ねー、お兄ちゃん。どしたの？ 誰からー？」

「いやー、古い友人が通りかかるらしいからさ。家に入れてもいい？」

「いいって……そんなお兄ちゃんの友人を叩きだすことなんてできないよー」

「いい？ わかった……それまでコタツ満喫するでしょう」

「いやいやお兄ちゃん、流石に何か用意しなきゃ」

「いや妹よ、アイツは小食だからいいんだよ」

「いいの？ じゃあ。ゆっくりしよー」

「だなー」

それで納得するキリはいいのか、と疑問を抱く人間はここにはいないのだった。

そして三十分後のこと。

「はあー」

「へにゃー……あ、ちよつとトイレいつてくるねー」

キリはコタツを這い出て、立ち上がりトイレへとダルそうに向かつて行った。

するとキリがトイレにインすると同時に、玄関のインターホンが鳴った。

「お、きたかー……はいはい、今出ますよーっと」

✱

✱

「お兄ちゃん、ごめんねてー……っで、にやっ!？」

キリはそのこたつで兄とくつろぐ、訪問者の様を見て奇声をあげた。

「あ、お邪魔してまーす」

「どうしたんだよ、妹？」

「い、いいいいいやだつて！
だつて、え、え、えええええ
ええええええええ！」

「そういや自己紹介したら？」

勇者のコタツで言う対角線上に足を入れていた訪問者は、

「こんにちは、アール地区の魔王です」

魔王ですって、聞きました？

「ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま」

「妹、母が恋しいか？ 残念、俺でした！」

「どうでもいいよ！
だってだって！」

魔王の容姿といえば、身長は二メートルほどある上に体軀は筋肉で塗り固められたようにゴツく黒ずむというか黒で、背中には今は閉じているコウモリの翼のようなものによつきり突き出ている。

顔も彫が深く顔色までも暗く黒く、口元から先端の鋭く上がった歯が下方向に二本突き出ていた。

……だというのにピッチピッチの緑色地に”パッケマソ”ドット絵が描かれた半そでTシャツと着て半ズボンを着く、それにアクセサリとしては高い鼻に縁の四角い眼鏡をかけている。

元の素体は明らかに魔王と言うか人外そのものだというのに、装飾のせいでちぐはぐな印象を受ける。

「……………ええ、よくみれば、なんか変」

「変とか言わないでくださいよー、このパッケマソ！ いいでしよう、高かったんですよ！」

「ああ、すげえイイ！　なんかパッケマソが円形というより楕円になってるけど。ということで、友人の魔王Rだ」

「いやいやいや！　友人の魔王ってどういうことなの！　お兄ちゃん勇者だよね！？」

「勇者と魔王が仲良くなっちゃいけない法律でもあんのか？」

「ひどいっすよー、これでもタケルさんとは趣味の合う」レトロコレクター”なんすから」

なんというかその体躯で、若者喋りってのは違和感が……声が容姿に似合わず高くて若いのも凄まじい。

「レトロコレクター……？　ああ、バカ兄が集めてる”ああいう”の？」

「ああいうのだ！」

勇者タケルの趣味は魔王倒しなどの面倒なことではなく、レトロコレクター。

適当に穴を掘ったり、洞窟を探したり、廃墟を探ったりしてレトロな物品を集めること。

……てか、なんという勇者の意味がない趣味。

「そうだ、アール」

「それ名前なんだ」

「はい、正確には”アールⅡ魔王Ⅱ斉藤”です」

「どういうことなの!？」

魔王がミドルネーム的立ち位置らしい。

「はあ」

「そそ、そういえばさ! この家さ、動いてるっしょ?」

「それ僕も思っただんですよ!」

僕?

「もしかして、伝説と言われた……移動式住居だったりします!？」

このプレハブが伝説……なんか一気に安っぽく。

「大当たり! ○○の町の市場で掘り出したんだよ」

「すげー、滅多にお目にかかれないヤツじゃなっすかあ! それにコタツ付きなんて粋ですねー」

「だろー、コタツ最高じゃね?」

「くー、体躯がデカくなければ太ももまでいれたいっすよー」

「あー、でもこの部屋圧縮空間だから、出来るだろ?」

「おー、出来そうっす。じゃあお言葉に甘えて——縮小」

そ、そのまんま。

すると魔王は縮み始め、おおよそ一メートルと六十センチほどになった。

「ふー……たまらないっすね！」

「だろー！」

妹のキリはその二人の息の合いっぷりに、引いていた。
そして今の縮んだので、もっと引いた。

「（お兄ちゃんの交友関係って一体！？）」

そう衝撃を受けている間「おー、アール。コレコレ、ファミコソのコントローラ」「やべえっす、やべえっす！ お宝とかいうレベル超えてますよ！」

とレトログッズの話題で盛り上がっていた。

とりあえず勇者が冒険を続ける主な理由は、こういうお宝回収らしいですよ。

「はあ……」

キリ、こんなことで溜息ついていたらそのうち肺の空気が全部なくなってしまう気がする。

5話 勇者、実は強い。

「それでタケルさん、最近ある場所にお宝が眠ってるそうなんですよー」

「マジで？ どこよ、どこ情報よー、それー？」

えーと、ここでレトロコレクターについて説明。

いわゆる古いものを集めることで合っているのだけど、その古い物品というのもおおよそ、どれだけ新しくても三〇〇年前よりも以前のこの地上に存在して今現存するものに限って「レトロアイテム」という。

それを集める趣味屋から商売屋まで含めて「レトロコレクター」そんなところ。

で勇者タケルと、この魔王アールはそれだということ。

「てかキリもこっち来いよ、アール悪い奴じゃないぞ？」

「そうっすよー、良い魔王っすよ」

「良い魔王って……本当になにもしない？」

「しないしないって、てか俺がさせねえからな。な、アール？」

「とんでもないっす！ タケルさんの妹さん何かに手を出したら殺されますっ」

「ああ、少なくとも——痛みは与えないからさ」

そうタケルは、魔王とキリが見れば底冷えするような冷たい笑みを浮かべてそう言った。

その時確かにこの小さなお茶の間の空気は張り詰め凍りついたのだった。

それに耐えられないキリは空気をほぐすようにして、

「う、うん。わかったからその顔なし！」

「変な顔してた？ わりいわりい」

「もう僕、会心しましたから……はい」

心なしかアールも震えているように見える、なるほどこのチート勇者を怒らせてはいけないようだ。

「改めて妹さん、自己紹介しますねー。僕はアール地区第五十二代魔王のアール・魔王・斉藤です」

「あ、この兄の妹のイノウエキリです。兄がいつもお世話に」

「いやいや、僕こそお世話になってます。タケルさんとはたまにこう言ったレトロアイテムの話題で盛り上がりたりしてるんですよ」

「そそ、出会った後に知ったつけ……懐かしいな」

「魔王やりながらレトロコレクターって肩身が狭くって、殆ど勇者や魔法使いから譲ってもらうしかなかったんすよ」

そりゃガタイ良いせいで肩幅デカイけど……って違う？

「で、俺から巻きあげようとしたんだよなー」

「いつもは勝手に置いていってくれるのに、タケルさんだけは……もう絶対タケルさんとは戦いません」

「ひどいなー、大丈夫最近鈍ってるから」

「……タケルさんの”鈍る”って魔王五人でも勝てませんから」

なんか予想以上のチートっぷり。

で、キリが動揺してるんだけど。

「え、え？ お兄ちゃん、そんな強かったの？」

「そっすよー！ タケルさんの全盛期を見た同僚は帰ってきませんでした」

魔王の同僚って、違う地区の魔王とかそんなところ？

「でも、俺戦うの面倒だし。週一回の強制クエストも無けりゃ楽なのに」

勇者としてこの地上にいる以上、モンスター討伐などはある種の義務のようなもの。

一応ギルドに所属していた勇者は建前上、何かしらのクエストを受けなければならないらしい。

「お兄ちゃんはいくらなんでも怠け者すぎだよ」

「そういうお前は俺の経験値横取りしてる癖になにを言う」

「だって……それは有効活用だし、お兄ちゃんメーターマックスだから仕方ないじゃない！」

「……メーターマックスって初めて聞いたんすけど、え。タケルさん、冗談ですよね？」

「いや、それは本当らしい。ホイ”バリユーカード”」

バリユーカード、まあ勇者や魔法使いの主なプロフィールが書かれているカード。

戦闘力とか経験値とかね。で、タケルの場合は最高の値である九九九九九九だそう。

実際は一億以上らしいけども、それ以上のメーターマックスが殆ど存在しないので計れないとか。

レベル1は十ぐらいでレベル2になるらしい、チート過ぎてもう数字がどうでもいい。

「マ、マジじゃないですか！ ……今まで見てきたバリユーカードでもこんなの初めてっすよ」

「まあ俺はこのお茶の間が入ったから、全部どうでもいい」

「お兄ちゃん！ 私の成長はどうでもいいっていうの！？」

「ああ、たまには自分の力でも頑張れ」

「やだ、まだ見習いだもん」

ちなみにレベル5で見習いから、一応ランクアップらしい。

てかキリやる気無さすぎだろう。

「お兄ちゃんといると高レベルモンスターしか出てこないし、高レベル勇者や魔法使いしか出てこないから無理だよ！」

経験値を嗅ぎ付けてモンスターはやってくるらしいし、経験値上げやアイテムゲットの為に勇者同士、魔法使い同士が戦うこともあるらしい。

「じゃあ一人でそこら辺歩けばいるだろ？ スライム」

「やだ、コタツから出たくない。お金も殆ど貰えないし」

「お前なあ……」

色々と呆れる妹だこと。

「じゃあ、長居してスンマセンっした！ お茶お味しかったす、コタツ最高っした！ 今度はお土産持ってきますんでー」

「おお、期待しとくぞー」

そうして魔王アールは移動式お茶の間を出た。

ちなみに圧縮空間なのと、魔王自体が力を使っているが為に小さくなっていたが。

魔王アールの実寸は四メートルほどだった。

「え、窓から見えるのは……アールさんだよな?」

「だぞ、アイツでけーからな」

[illegible]

未だにアルミサッシ風の窓からは背中的一部分しか見えない。

お茶の間住居だけで半分ほどに縮小し、自分の力で更に縮めたい。

……あんな巨体なのにTシャツはやっぱ「パツケマソ」ううん、違和感満点！

.....

しばらくキリは啞然としていました。するとタケルの携帯（古典機改）が鳴った。

「なにになに……ああ、強制クエストか。近くに中継地点もあるか、じゃあちよつくら行ってくる」

そうしてやる気のない勇者イノウエタケルの強制クエストが……

6話 勇者、ジュースが飲みたい。

勇者イノウエタケル、クエスト参加の為の準備を自室にて。ちなみにキリは「もうちょつとコタツ満喫したい」と二ト状態。

壁にもたれ掛かるのは、透き通ったクリスタルのような輝きを放つ長剣で、それはタケルの主要武器で今回も――

「さて、と行きますか。プリズムソードは……重いから止めて、木TOでいっか」

使わなかった。

木TO……木刀っぽい刀。たまに料理包丁の代用として使ってるらしい。

それも重いつて……まあ、その要素は大事だけど。

「うーん服は……長袖の方がいいよな、うん」

え……長袖Tシャツとジーンズ。超・軽・装!?

「食料は……現地調達でつと」

おおう、なんというかわイルドすぎる。

「バリューカード持ってと……はい、レッツらごー」

やる気なさげに竹刀を、まさかのベルトとジーンズの隙間に挿入。装備完了――テキトーすぎないかね？

勇者はキリに軽い別れ「ちょっと出かけてくるー」を告げて、外に出る。

それで改めて外から家を眺める。

「このプレハブ感がたまらん……」

見かけは本当に長方体のプレハブに窓がついているだけだった。本当にどんなスペースがあるのやら、と思えるほど。

タケルはガレージのようなもののシャッターを開けて、スクーターを取り出した。

プレハブ小屋の周りは、果てなき荒野。

砂埃が常に舞っているのを鬱陶しいように、バイクにかけてあったゴーグルを付けてアクセルを開けた。

「じゃ行きますか」

前照灯が点き、スクーターはゆっくりと浮き始めた。

そして爆発したかのような一気な加速、砂煙を撒き散らして飛び始めた。

ここで言うスクーター……普通のスクーターを思い浮かべて、そこからタイヤを取ったら出来上がり。浮上式で地面から最大一メートル浮きあがり、最高時速は六十キロメートルほど。

近くにあることが分かっていた中継地点へと辿りつく。

中継地点…Dワールドゼクス国五百と三十五番。通称「サンドヘブン」

そこは最近出来たばかりなのか、廃墟をリフォームして作っただけの簡素なものだった。

だから見かけは信じられないぐらいにボロい、だけでも中に入れば粗不思議……じゃなくてあら不思議。

無機質な白いタイルが床には張られ、壁から天井にかけて全部白。汚れやすくね？ とかは聞かなくていい。予算削減なのだろう。

タケルはスクーターを駐輪場に置いて（注意…滅多な事で”輪”を持った移動機械はない）早速中継地点の建物へと入っていった。

「……喉渴いたな」

クエスト完遂までの期限は、ものによるが一番簡単なものは今日中に。

例えば五百と十一番に発生したスライムの集団を掃除してこい、とか。

まあ、今は昼にもなっていないのでタケルにとって時間は余るわけで、別に急ぐ必要は無かった。

なので、ジュース一杯でも飲んでからクエスト受けようなどと画策していたのだろう。

「つと……あれ？」

ポケットをまさぐると、バリューカードさえあるがゴールドカードはなかった。

ゴールドカード……まあ、金いれとくカード式貯金箱みたいなものでいいんじゃない？

まあ、お金が無い。ってこと。

もちろん小銭なんてこの時代に持ち合わせるのは店側への嫌がら

せか、重度の貨幣コレクターぐらい。

そういえばコタツにゴールドカードを置きっぱなしにしていることを勇者は改めて思い出し、

「ジューズも買えないか……じゃあ、ちゃっちゃと終わらせて報酬で買うか」

この勇者は何を言っているのだろうか？

報酬である賞金を貰う目的がジューズ一杯って……今そこらで自分のバリューカードとにらめっこしてる大きな重装備の勇者がブチ切れるぞ？

勇者というのは広域なことで、タケルは剣使い。槍も弓もハンマーも銃もミサイルも薬品使いも、全部この地上で戦ってさえいれば「勇者」ということになっている。

ちなみに魔法使いはまたの機会で。

タケルは天井までにゆうにあり、人数人ほどもある幅の液晶画面の前に立つ。そこにはクエスト内容の記された画像が表示されている。

それをタッチし、バリューカードをかざすことで、そのクエストを受けることが決定する。

「どれーにすっかなー（正直はやく終わるクエストがいい、ジューズが買えればいい）」

なんだこの勇者は。

目を付けたのは――

ゴーレム掃除…賞金一〇〇〇G、期限明日午前六時。

ちなみに敵を倒す際で”掃除”と表現するクエストがある。それ

はもう跡形もなく、肉片の処理まで行うのが仕事内容。

今出ているクエストで一番安い。ものにはよるが、これでジュースは一ケース二十四本を二セットは買えるだろう。

「面倒だけど仕方ない……っか」

そうタッチしようとしたところ、

「あ」

「ん？」

同じクエスト内容をタケルとスロー判定でも同時なタイミングでタッチした者がいた。

「すみません、私に譲って頂けませんか？」

そう言うのは袴姿で日本刀らしき艶光する漆色に塗られた鞘を腰に携えた、なかなか綺麗な声を持った若い女性。おそらく美女の部類に入るであろう美しい面持ちで、なんともつり上がった目と白い布の髪留めで結われた長いポニーテールが特徴的だ。

「いや、悪いー。俺がこれやりたいんだよー」

頭をボリボリ掻きながら、そう軽くタケル……すごい。言葉と態度が変わることで、ここまで誠意の籠り方が違う謝り方となるとは。

「……いえ、先にタッチしたのは私ですから、申し訳ありません」

「いやいや、俺先だってー」

女性は口調こそ丁寧だが、笑顔が引きつってる。タケルはだらし

ない笑顔で、それも譲らない。
いや、確かに一番簡単なクエストではあるけども。

「剣使いの方、これは一番報酬の少ないクエストなのですよ？」

「知ってるよ、それでいい」

「よいのですか？ きつとあなたならば、もっと上のクエストが妥当ではないのでしょうか？」

袴姿の女性はこのテキトー勇者がレベル一〇〇の経験値メーター振りきれの

「まあ、そうかもしれないけどさ……メンドウくさい」

「め、面倒……っ！」

そのあまりにテキトーな態度に袴姿の女性は、何かの琴線に触れたようで。

「そ、そんな姿勢であなたはクエストに望むというのですか!？」

「ジュース一本買いたいただけだからさ」

「の、飲み物……ですって」

それや怒りますよ、こんな真面目そうな人がテキトーに一番報酬の少ないクエスト選ぶはずがないですもん。

「か、勘弁ならないです！ その剣使い！ 私と決闘しなさいっ」

ついに頭に血が上った袴姿の女性は言い捨てるように、そう言った。

決闘……勇者と魔法使い、勇者と勇者etcなど「モンスター」

との戦闘ではなく、人同士の対戦を言う。アイテムやGを賭けたり、経験値稼ぎの為に行われる……感じかな？

「俺が勝ったらジュース奢ってくれるならいいぞ」

相も変わらずテキトー勇者。逆なでしているのがいい加減に分からない。

「も、もちろんいいでしょう！ ただ本当にそれだけでよろしいのですか？ ちなみに私は無理に申し込んだ以上何も要求しません！」

まあ、要求しても無理なんだけどね。

さてさてこの二人の決闘の模様は……次回辺りで。

7話 勇者、決闘する。

「おいおい決闘だつてよ」

「剣使い同士か……要はどっちが剣の扱い方とかで決まるな」

「剣使い×剣使い」

「あっちの袴姿の女可愛くね？」

「男の方は冴えないな……低レベル勇者か？」

何をおっしゃいますか、この方は世界に数人といないチート野郎でございますよ。

ヤジ馬が集まる中、中継地点のすぐそばの平地で決闘が行われることになった。

袴女の方が大声で叫んだ為に、クエストを受けに来た勇者や魔法使いが面白がって集まってきてる次第……まあ、なんというか色々可哀想だよね。

『決闘者はそれぞれ向き合ってください』

空中を葉の楕円のカプセルのようなものが浮いて、そこに付いたスピーカーから機械的な女性の声が流れだす。

「私は、カミヌシ神主 マイ舞！ 剣使いで、使用武器は日本刀です」

おおっーと日本刀の使い手ということで会場が少し沸いた。

日本刀は切れ味こそ良いのだが、そもそも日本刀の技術を伝承した鍛冶屋があまりにも少なく、現在つくられるのはごくわずか。

もし本物で最盛期に作られたものならば、レトロアイテム中のレトロアイテムとなる。

「えーっと俺は……井上武？ 剣使いだな、うん」

何故に自分の名前が疑問形なのかと。

その時「イノウエタケル……聞いたことあるな」「人違いだろ？
または同姓同名とかさ」「まあ、ありえないよな」と話していた
けども、ご名問。

賞品としてタケルと一分戦える権利を……っと、持ちあげすぎる
のもなんですね。ここまで。

「使用武器は何ですか？」

「木刀？」

どっと会場が沸いた。それもバカにするような笑いで、だ。

木刀は日本刀の模造品で、それも再現度は低く強度もない。あき
らかーに練習用である。

ただ、タケルの木刀は普通のものとは違った。刀身は木製ながら
銀色に塗られ、柄にも繊細な模様が描かれている。

そして木製にはありえないほどの切れ味をもっている。切れ
味はたまに料理包丁としていいることから察していただこう。

「馬鹿にしているのですか」

「いや馬鹿にはしてないけど、今俺これしか持ってないし」

会場爆笑の嵐である。

「……対戦相手がここまで、愚かな男だったとは……！」

「おいおいひどいなー」

『バリューカードを任意で提示してください』

バリューカードは任意で提示することが出来る、提示を選択すると自分のレベルが表示・公開される仕組み。

「私は提示する」

そう神主は言うのと、空中に透けた画面が映し出され「レベル…23」と出た。

おおーっと会場が「あの若さなら結構いいんじゃないかね？」「俺と同じぐらいか」「嘘付け、お前見習い卒業したばかりかだろ」

「俺は――」

タケルがそう言ったところで「お前はいいよ」「どうせ勝負は決まってるんだから時間を無駄にすんな」ひどい言われようだ。

しかしタケルは気分を害した様子もなく、

「そう？　じゃあ遠慮しよっかなー」

どこまでもテキトーである。

『それでは双方準備は完了しましたか？　口頭でお答え下さい』

「はいっ」

「おう」

神主はハッキリとした声で、タケルはやる気なさげな声で。

『それでは――決闘開始』

「井上様、覚悟ッ！」

そう、神主が真正面にタケルを見据えて切りかかったその時、その瞬間だった。

ニヤリと笑いタケルの口がこう言った。

「じゃあ、ちゃっちゃと終わらせますかね」

それは刹那だった、コンマ零秒の世界だった。

勇者は神主の前から消えていた。周囲の人間はそこにいたタケルを見つけることができない。

しかし一秒と経たずに勇者は神主の背後へと移動していた。

「なっ」

「はい、終わりっつと」

まるで木刀を捨てるような雑な手つきで振るうと、その刀身の峰は彼女の首筋に向かっていった。

雑とは言っても、彼女が振り向く隙も無いほどの速さで。

バタリと神主は地面へとうつ伏せに倒れた。

下は砂で、神主が倒れたことで砂煙がぼつと舞った音だけが会場を支配する。

「ジュース一本な？」

うつ伏せに倒れた袴姿の女性を見下ろしながら、タケルはやる気なさげに呟いた。

タケルの経験値ポイントが画面に映し出される頃には、神主以外の全員が逃げ出していた。

＊ ＊

「どーっすかな」

医療室で寝ている神主を眺めて、タケルは呟いた。

自分が倒したから一応は最後まで付き添うか、と医療室に入った途端に医務官を除いた患者が全員逃げ出した。

それも先程のタケルのカンスト経験値が映し出されたことが伝播しての結果である。

「あのー、井上様。あなたがいると患者が……」

「あー、悪い」

しかし放るのもなあ……仕方ない。

「あー、分かりました。知り合いなんで俺がコイツは連れてきます」
「そう？　じゃあごめんなさいね」

しれっとした顔でタケルはそう言うのと神主をおぶって医務室を出た。

医務室を出てから人が避けるように道を開けてくれたおかげで、神主を運ぶのに時間を要しなかった。

その間の中継地点は恐ろしいまでに静まり返っていた。勇者タケルはこの状況に慣れているので、特に気にしなかった。

「仕方ないよなあ……クエストはやらんといけないし」

というかあの医務官テキトーで「はやく連れ帰ってくれない？
あなたの知り合いでしょ」オーラを出していたので仕方がなかった。
神主が倒れても誰もかけよらないところを見るに、一人なんだろうし。

「まあ、俺は何もしないって」

すやすやと美麗な顔の持ち主の神主は眠っている。

「こんな時のために」

スクーターまで連れて来てから、スクーターのあるスイッチを押す。
赤十字のマークが書いてあるスイッチだ。

押すと、荷台部分ぐーんと伸びて人一人載せられるほどまでに長くなった。

そう、このスクーター。担架機能付きだったりするのだった。

「失礼しますよっと」

担架に寝かせて、軽くベルトで固定。

ついでに砂埃でむせられても困るので、充電式の保護膜を設定して運転室から神主の担架部まで覆う。

「ジュースも御馳走になってないし、仕方ない。約束は守って貰わないとな」

なんとか、ビミョーなところで意地っぱりなのかもしれない
なこの勇者。

「じゃ、ゴレームさんのところに行きますか」

神主の寝る担架の付いたスクーターを発進させた。

勇者は夕日の沈む中、クエストに向かったのだった。

＊ ＊

『あー、俺タケルだけど。悪いまだ帰れない、じゃな』

ブツッと留守番録音が切れた。

「どーいうことなの!？」

お茶の間のコタツで寝ていた（注意…良い子は風邪をひくからコタツ寝は止めるんだぞ☆）キリは一人外が暗くなった部屋で叫んだのだった。

8話 勇者、拉致。

神主舞、それが私の名前です。

今年十七歳を数える「勇者」に属し、剣使いで使用武器は日本刀です。

私は……この地上に蔓延る異物達を討ち滅ぼす為に、勇者を志望し勇者となって三年前に地上に降り立ちました。

映像や祖先から言い伝えられたから、綺麗だった頃の地上を私は見てみたかったのです。その為には地上を支配する異物を退治するのが先決と考えました。

それからはクエストは勿論、非クエストのモンスター討滅も行っていました。

後に意志を共にするギルドに入り、仲間とともに異物退治を進め、少しの無茶も気にせずにいきました。

しかし……私は魔王に挑み、私の所属していたギルドは私を残して魔王の部下の高レベルモンスターによって全滅。私だけが生き残ったのです。

今でも仲間が地獄の炎で焼かれて跡形もなく燃え去って行く光景を覚えています。

経験値こそ減ることはありませんでしたが所持品はこの日本刀「ナツメ」を残して全て失い……ある種のトラウマのようなものが出てしまいました。

高レベルモンスターに遭遇すると、自分は今度こそ殺されてしまうのじゃないか……そう思ってしまうことが多くなり、敵前逃亡ばかりになり、自然とクエストも無茶をすることはなくなっていました。

たまたま訪れたDワールドゼクス国五百と三十五番の中継地点には、一番低いレベルのクエストが私の見つけたそれでした。

しかしそのクエストをほぼ同時に申請しようとした男がいて、その男の姿勢は最悪と行っても過言ではありませんでした。

格好はこれほどにも無く軽装で、態度も軽く……私は私情でこの低レベルクエストを志望しているとはいえ、その男があまりにも勇者としては、クエストそのものに向かう姿勢が悪過ぎたように思えたのです。

確固として勇者はそれも譲らない上に……クエストを請け負う理由が、飲み物一本。

あまりの不誠実さに怒りが爆発して、クエストの危険性やその意味を分かってもらおうと私は決闘を挑んだのです。

そうだというのに――

＊ ＊

「……………っ！」

「お、起きたか？」

私は目覚めると、言い知れない浮遊感を浴びていました。どうやら震動から移動物の上のようでした。

そして気付くと、その声の主はやはりやる気のない男性の声。そう、おそらくは私の戦った木刀使い。

「な、なんなのですっ」

「いや、お前倒れてたし。医療室からは追い出されたし。あ、拘束してるのは落ちるとヤバイからな」

倒れた……？

そういえば部分部分に圧迫感を感じるのは、ベルトで何か布団のような物の上に拘束されているからでした。

「私は負けた……のですか？」

「まあ、そうだな」

木刀使いは呆気なくそう言いました。やはりその態度が私は気に食わなくて仕方ありませんでした。

「ここは……どこなのです？」

「うーん、番地言うの面倒」

……何処まで適当なのですか、この剣使いは。

「まあ、お前と俺が受けようとしたクエストの場所に向かう道中ではことは確かだな」

「クエスト……」

確かそれはゴーレムの掃除だったはずですが……

「そ、それよりも！ 何故私は負けたのですかっ」

「何故って……単純な実力差じゃないか？」

木刀使いはさも平然と、鼻に掛ける様子さえなく言いました。

「こ、これでも私はレベル――」

「あー、俺レベルとかどうでもいいから」
「っ」

高レベルモンスターのトラウマこそありますが、着実に低レベルモンスターのクエストを行って手に入れた経験値に値するレベル……なんです。

それを、どうでもいい……？　こんな不誠実男に私の全てが否定されて気がしました。経験値は勇者や魔法使いにとって地上でどれほどまでに貢献したかを示す数値でもありますのに……！

「というか何故あなたは私を拉致したのですか！」

「いやー、ジュースジュース」

「まさか……ジュース一本を奢らせるために拉致を？」

「うん」

こ、この男はっ！

「おお、見えてきたな」

「……私は空しか見えません」

「着いたら防御壁付けて、拘束は解くからさ。スクーターは止めてからな」

どれだけ首を動かしても木刀使いのTシャツ姿の背中しか見えませんでした。

膜の周りは砂煙が待っていて、横を向くと遠くには竜巻が巻き起こってしまいました。

ここは砂漠のど真ん中でした。

「とーちやくーっと、おお」

「はやく、はやくしてください！」

「急かすなって……ほいよ」

「……まったくジュース一本の為に拉致をするなんて、信じられま……せん!？」

私は砂の地上に降り立つと、その光景に絶句しました。

「あちゃー、こりゃ依頼主ケチったな」

木刀使いが頭を気力なしと言わんばかりにかいている一方で、目の前の光景をみて私は絶句しました。

確かにゴーレムがそこにはいました、岩だけで人型を作ったところのようなものになるであろう、そんな姿。

しかし大きさが段違いで、数も段違いだったのです。

「個体それぞれが三メートル以上……それに十数体だなんて!」

「まあ、依頼主は知ってたなら詐欺レベルだな。こりゃ1000Gじゃないな、少なくともこの二十倍は請求できそうだ」

このゴーレムは知能こそ低く、ただ岩で出来た腕を振り回し、岩で出来た足で踏みつぶすだけです。

しかしその岩一つ一つが何トンもあり、だというのに足は遅くない。

それに成長体で、中レベルモンスターに分類されるのがそれらでした。

それが十数体もある……ギルドメンバーで受けてもやっこのような物に、私は思えました。

「ぼ、木刀使い!」

「なに?」

「これは……無謀すぎます!」

「そうか？」

「そうです！　これほどの相手無理ですっ」

「いやー……まあ、面倒臭くはあるが」

この男は自殺願望があるというのですかっ！

「悪いことは言いません！　クエストは放棄するべきですっ」

「いやさ、お前は黙ってそこにいれば良いって。えーと、防御壁はスクーターの盾マーク押せば出るから」

「黙ってなどいられ——」

木刀使いは聞く耳を持ちませんでした、もし私とその集団の前に立てば……トラウマで足がすくむことでしょう。

そうだというのに、目の前の勇者は————木刀を真正面に構えて笑みを浮かべていました。

「木刀使いっ！」

そう叫んだ瞬間でした、周囲に圧倒的な変化が起きたのは。

” 3 / 4 a m i 斬り ”

勇者は斜め後ろへと剣先を向け、円を描くようにして木刀が振るわれました。

その剣の振り方は、遊びで剣を地面に向かって水平に振ったようにしか見えません。

しかし地に敷き詰められた砂が一斉に空へと巻き上がり、その砂は目の前を大きな音を立てて走り駆けてくるゴーレムに向かって行

きました。

その砂がゴーレムを通過した途端、

「っ」

ゴーレムがスライスされたかのように上半身から下半身まで細かく切り刻まれ、まるで砂の城が崩れるように質量を持っていたはずのゴーレムは砂となって地面に崩れ落ちていきました。

それは一体だけでなく、後ろに連なる、横に連なる全てのゴーレムが一斉にそう粉碎されたのです。

そう、それはおよそ五秒にも満たない出来事です。

さっきまでのやる気のない木刀使いだとは信じられない、圧倒的過ぎる力を見せ付けられました。

三メートルあったゴーレムは跡方もなく、一面広がる砂漠の中で僅かに砂漠の自色と違う箇所が残るのみでした。

「木刀使い……あなたは一体——」

そう呟いた瞬間に、空中に現れた画面に経験値が表示され言葉が漏れました。

しかし木刀使いはそれに答えることなく——

「ああ、喉渴いた」

全ての桁に「九」が並んだ、いわゆるカンストした経験値表示。この男はまさしく——レベル一〇〇の伝説の勇者でした。

9話 勇者、おしるい。

神主視点だとなんか凄いつぽかったけどね。

……いやまあ、凄いことには変わりないんだけどさ。
タケル視点だと、こうなる。

＊
＊

あー、面倒臭い。家帰ってコタツ入って緑茶すすりたい。

あの外は砂漠で暑さムンムンだっていうのに、お茶の間内には冷房で寒いぐらいにして温いコタツに入る！

アレ以上の至福はないね、緑茶のこと考えてたらまた喉渴いてきた。

『ここは……どこなのです？』

起きちゃったことには仕方ないからテキトーに答えておく。

なんか彼女、コロコロ表情変わってる気がするけど、まあいいか。
とりあえず目の前に見える敵倒そう。でっけー、クエスト報酬の割りあわねー、実は俺にはそんなのどうでもいいー

木刀構えて、はいちよい回転すりゃいいか。

……なんか技繰り出す時に言った方がいいらしいから、今考えたヤツを適当に。

つぷ、要は半と半々回転として木刀振るっただけど——語呂的にいいかもしれん。

いかん、気に入った。面白い。

”3／4 a m i 斬り”

なんか、妙にツボ。

でも喉渴いたわ。帰りた、お茶も飲みたい、お茶の間へ。

「ああ、喉渴いた」

彼女なんか言っただけで風音で聞こえないわ、いいかスルーして。

さて、帰るか。

＊ ＊

予想以上のひどさ。

まあ、あの技地味に凄いですけどね……なんという残念勇者。砂を空中に持ち上げた上に、前方向へと勢い付けた上に砂一粒単位で高速振動させて、いわゆる勝手に前方に向かう電動ノコギリ状態になってたってこと。

それも頑丈そうな岩の塊を粉碎するほどの威力で、凄いのになんというか、うん。

それでタケルといえば、バリューカードに付属したカメラ機能で倒した痕跡を撮影するとスクーターに乗る。

一応クエスト終了を確認する為の行為なんだけども、あくまで保険で。クエスト開始時に動画撮影機能が稼働するようになってるから必要ないんだけどね。

その動画撮影ってのも何か衣服や物体を通してでも出来るからすごいね。

「おーし乗れ、中継地点で約束のジュース頼むぞ」

「え、ちょっと待って下さい！」

「なんだ？ あ、担架モードのままだったな。ハイ、直したから後ろに座れるぞ？」

「そうではなくて！ あなたは一体何者なんですか？」

「俺？ レトロコレクターだけど？」

「レトロ……なんですか？」

「大昔の物品とか集めるのが趣味なんだよ、で副業が剣使いね」

「そっちが本業でないのですか！？」

「うん、俺勇者とか興味ないし」

「な、なんという……」

彼女は思ったことだろう、勿体ないと……今に始まったことじゃないけどね。

「置いてくぞ？ いや、やっぱ連れてく。そしてジュース奢れ」

「どこまでジュースに執着するのですかっ！ あの、一応飲み物はあるのですけれど」

膜を張り、スクーターを発進させながらタケルは聞く。

「え、あんの？ なになに？」

「えっとですね——おしるこです」

なぜ持っているのかと。

「この砂漠でおしるこ……まあ汁物には違いはない？」

「無理しなくてはいいいのです、ただとても美味です！ ああ……勿論、中継地点に送って下さればジュースも御馳走しますから」

「うーん、じゃ貰うか」

「運転中ですから、開けておきますね」
「サックス」

あれ、神主なんか慣れてない？

「（まあ正直結構暑い砂漠でおしるこって……出来れば、コタツで飲みたい。それでも貰ったしなあ、美味しいって言ってるし頂くか）
——頂きますつと……ごくっ——!？」

その時タケルは衝撃を受けた、改めて開けられたおしるこの缶を見直す。

「（な、なんだこれは。口に含んで普通はべとりという感触が先行しそうだというのに、飲み口はさらり。だというのにどっとおしよせる小豆特有の癖のある甘い香り。それなのにその甘さも口からはすつと引いて、まるで何もなかったかのようなあっさり感。それでも何故か後を引く、体がその糖分を小豆を欲しがってしまう。冬に特化したような、特殊飲料だと断定していたというのに。これはブドウ糖も摂れて頭の回転をよくして、ほのかに分かる塩分が体にしっかりと吸収される、そして後を引くのにきっちり飲みきれば口の中は潤い、圧倒的な満足感。ちよつとぬるくなっているのに、くどくなくこの暑さでも十分に美味しくいただける。もしこれをほんわかに温めて寒い最中に飲んだら……!）」

あのテキトー勇者を饒舌にした。

「（ごくり……つまり。なんだこれは、すっごいうまいぞ!?)」
「お口に合いましたか？ 私のお気に入りなのです」

「(……これはケースで欲しい)」

いやいや、どういふことやねん。

10話 勇者、昔話。

そんな訳で、タケルと神主は中継地点へと戻るのです。たと。

中継地点の受付でクエスト終了の確認をして貰い、クエスト成功を告げられた。しかし報酬を受け取る為のゴールドカードはなく、

「すみません家にゴールドカード忘れちゃって、ゴールドカード作れます?」

「わかりました、少しお待ちください」

わざわざ作らせた。どこまでもモノグサな勇者だ。

すると袴姿の女性、神主が受付で待っているタケルに話しかけた。

「は、はい……それであなはどのような飲み物を所望なのですか?」

「お、行く行く」

と、タケルは神主に付いて行き自動販売機までやってきた。

「うーん、じゃコレ」

「緑茶ですね、はいどうぞ」

「頂きます……ごくっ——っ! (な、なんだこれは! ただの緑茶とパッケージだけでは見くびっていたが——)」

もういいって。

「それでは、色々御無礼を働き申し訳ありませんでした」

「たか、思ったけどさつきからどした？ 俺愚かな男なんじゃないのか？」

「たしかにとっても愚かではありません」

それ言うのか。

「でも、あなた様が経験を積んで得た行動ならば何も申すことはありません。とても気になってしまいますが、矯正させてあげたいですが」

神主は説教とか好きそうだ。

「いやまあ俺も悪かったよ、クエスト横取りみたいな感じになって」

タケルが謝ったと……！　これが先程のおしるこパワーだというのか！？

「いえ、私こそ怒りつけて決闘まで申し込んで……本当に申し訳ありませんでした」

「あのさ、思ったんだけど……アンタ、レベル23有ったよな？ それなら普通にあのクエストじゃなくても良かったんじゃないか？」

タケル覚えてたんだ、意外。

「……ごめんなさい、私のわがままなのです」

「そっか、まあ仕方ないな」

「仕方ないでいいのですか！？ 身勝手に怒ったりしたのですよ！」

「まあ、でも何か理由があったとしても話したくないなら聞かないぞ」

おお、タケルに常識があるよう。

「……実はです——」

神主は自分が勇者になった理由と、魔王の部下の高レベルモンスターに自分の入っていたギルドが全滅させられ、何もかも失ったことを話した。

それで、予防線を張るように低レベルクエストでなんとか生きる為に稼いでいると。

「それで、俺と勝ちあった訳か」

「そうです、勝手すぎるんです……私は」

そう自分の持っていたもう一つのおしるこを飲みながら神主は俯きがちに言いました。

「……いやまあ、話してくれたから俺も話すけどさ」

タケルは、

「俺はさ、自由になりたかったんだ」

そう一言。

「自由……ですか？」

「人は皆地下に押し込まれて、それも地獄みたいな日々だったんだ。俺にとってはさ」

「……………」

「だから勇者になって地上に出たかった、拘束されることのない自

由の世界に」

「そう、なのですか」

「でもギルドには入るしかなかったし、だから独立できるように特訓も一杯した。でもいくら辛くとも俺は経過なんてどうでもいいからさ、とにかく一人で暮らせたらってその一心だった」

「それで、ここまでお強く？」

「それもあるけどさ、俺には妹がいるんだよ。妹はさ、俺からしたらひよっこ同然で、地下がいくら辛かったとしても安全は保障された。だから地上には来てほしくなかったんだけどな、来ちゃったんだよアイツは」

タケルは懐かしむように続けて。

「自由になりたいけど、そんなひよっこな妹も大事でさ。だから俺はいつでもアイツを守るようにもっと強くなった、内緒でトレーニングだってしてる。でもそれはどうでもよくて、とにかくアイツが元気に過ごしてれば俺はどうだってよかった」

「……………」

「だから、俺たち兄妹は一緒にいるようにしてる。アイツは俺から経験値横取りする為にいるけどさ、俺はアイツを守るためにいるんだよ」

「もしかすると、低レベルクエストを選んだ訳は——」

「まあ、早く終わって帰れた方がいいじゃん？ 妹は出来れば手元に置いておきたいしな」

……テキトーテキトー言っている勇者だけでも、そんなこと考えていたんだね。

「私のせいで、あなた様は帰れずに……一夜も」

「いいんだよ、一日ぐらいは。でもただ俺がちよっぴり不安に思っ

ただけのワガママだよ」

「あなた様は妹さんを大切に思っているんですね」

「ああ、妹を預けられた以上は絶対に守る」

なるほど、重度のシスコンか。

……なんて誤魔化すことはできないかな。タケルの妹を大切に思う気持ちは本物なんだろうな、もしかするとあのお茶の間も妹のためだったり？

ほら、話してなかった？ 売り文句で、

『敵からの攻撃があっても大丈夫！ 防御力六〇〇〇〇〇の超防御仕様！ 安心の一時をお約束します』

なんて、ははあ。

「……お優しいんですね」

「そうか？ 妹だから仕方ないだろう？ ……っと、こんなに話して

悪い」

「いえ、私が先にお話して、そして誤解しすぎていましたから……ええと？」

神主は、タケルの名前をあの決闘時には興奮状態で聞いていなかったのかもしれない。

「そーいやお前……てか、スマン名前なんだっけ？」

本当に心の底から覚えていないように、聞きだすように自分が名乗れるようにしながら。

「神主舞です、マイとお呼び下さい……ええと？」

「井上武、タケルで」

「タケル様ですね、覚えました」

「おう、マイな」

名前での相互の呼びは、もしやフラグ？

11話 勇者、ウチにくる？

マイと話していたタケルは廃墟を改装してつくった中継地点の建物内から窓越しに空を見た。

クエスト地点まで結構に距離があったせいで、クエスト終了確認時点で夜十二時ほどになっていた。

そこでふと疑問に思ったかのように、

「そーいやマイはこの後どうすんだ？」

「この後ですか……どうしましょう」

「どっかに泊るとかするの？」

「いえ、お金が本当に尽きてしまつて……野宿だと思います」

タケルはそれを聞きだす為にタケルはそうしていたのかも。

実際マイは”低レベルクエストでなんとか生きる為に稼いでいると”魔王討伐十敗時に全てを失い、それから”生きる為”

決して懷事情も良くないのではないかと、思ったのかもしれないね。

そうしたら案の定というか、野宿。

「いやー、マイ。ここで野宿は止めたほうがいい」

「そう言われましても……この寝台設備を利用するお金は――」

砂漠地帯の夜は、寒くてやってられやしない。だからこの中継地点は見かけこそアレだが、空調設備は完全だ。外にでさえすれば厳しい環境に晒される。

じゃあ空調設備の効いたこの中継地点で一夜を過ごせばいいかもしれないが、寝台設備はあるには有るが低価格だとしてもお金はか

かる。そこら待合所で寝るなどすれば、気を抜いた際に勇者や魔法使いに襲われることがないわけではない。

「ということで、ウチくる？」

タケルは恐らく考えていたのだろう、大分前からそれを。

「家……？ え、タケル様はここから家が近いのですか？」

「まあね、動くし」

「動く……？ 家……？」

「部屋なら無駄に余っているんだよ、とりあえず一夜はそれでな？
まあ俺の昔話っぽいことを聞いてくれたお礼に」

移動式居住空間の説明には『個室は初期設定では二個まで設置されています。ご希望に合わせて二十個まで追加設置できます』とあった。それから十分に人を住まわせる空間は裕に確保出来ることを覚えていた。

「いえ、そんな……悪いです」

「いやいや野宿するって言われたこっちの方が後味よくないからさ、少なくとも安眠は保障するぞ」

「ですが、お金も――」

「というかお金がなくて野宿するから、それを聞いているとはタケルは言わない。」

「じゃあ”あのおしるこ”一ケースをいつか貰えればいいよ、てかあのおしるこって市販してるの？」

「それなんかで……よろしいのですか？」

「ああ、アレ超美味かったから。あのおしるこに惚れたね」

「……わかりました、絶対に一ケースと言わず何ケースでもお譲りいたします」

「じゃあ決まりな？」

そうタケルは快活に笑みを浮かべた。

するとおもむろに携帯電話（超古典機）を取り出し、

「キリ、今から帰るわ」

『遅いよ！ お兄ちゃんの癖にクエストにどれだけかけてるのよ！』

”癖に”というのは”強いのに”という意味を含んでいるのだから、複雑だね。

実際キリの声も少し不安っぽかったし。苦笑しながらタケルは電話を切って中継地点の建物内を後にした。

外に出た途端に、体が冷えた”全身カイロ”がなかったら即死とは言わないでも、辛かっただろう。

タケルはマイが後部座席に乗ったことを確認すると、スクーターを中継地点の駐輪場から発進させた。

「ここから本当に近いのですか？」

「ああ、十分ぐらい」

「本当に近いんですね!？」

この地上での”近い”定義は普通に目的地まで二時間かけても当

てはまる。だからどちらかといえば”近所”あたりかと。

「見えてくる頃だな……お、あったあった。マイ、あれな」
「え、アレって。あの箱が……？」

指すのはどう見ても長方体の箱、かつプレハブ。

「見かけはアレだが、広いぞ？」
「ほ、本当なんですか……」

流石に疑問に思うだろうな、とタケルは考えながらすぐその箱の前にスクーターを止めた。
スクーターをガレージに収納してから、

「じゃ、これが俺の家」
「ええとお邪魔します……」

タケルがカギを解錠し、玄関戸（傍からは簡素なアルミドアにしか見えない）を開いた。
すると中に見えたのはその時点で玄関、外見のスペースだけでは玄関分もないだろう。

「キリ、ただいまー」
「お帰りお兄ちゃん……って、その人誰？」
「ああ、この人は——ってマイ？」
「っ！」

マイはトコトン驚いていた。まずは玄関から入ってすぐにあった居間がとにかく広々としていたこと。
そして、平然と中央に置かれたコタツ。

「これがタケル様の……」

「ああ、この家な。移動式住居なんだよ、圧縮空間方式だから見た目よりも広いし」

「移動式住居……という語呂からして、これは移動手段も兼ねているのですか？」

「こそ、でこの圧縮空間には余裕がある——ってことで、女性一人一泊二日な？」

「……それはいいけど、お兄ちゃんその人とは——」

「夜遅いから、それは明日な。じゃあ”部屋一つ追加、サイズノーマル”」

そうタケルが言うと、白いというかベージュに近い色の壁に茶色の木目の扉が現れた。

「じゃあ、鍵と……中はこうなってるっつと」

マイに鍵を手渡して、扉を開けてマイに見せる。

そこには一人部屋の一室にしては余裕があり、ベッドにクローゼットにタンスが揃っている。

そのベッドにはふかふかな羽毛布団がおかれて、ベッドそのものも寝心地の良さそうなセミキングの大きさ。

「っ！」

マイ衝撃と興奮が同時推し。

「ベッドか布団選択出来るんだけど、設定面倒だから今日はベッドで勘弁な？」

「い、いえ！ ほ、本当にこの部屋を私が使ってよろしいのですか

!？」

「もちろん、今日はマイ専用部屋。おしるこも約束したしな」

と、またタケルは笑みを浮かべて答える。

「でも、私が、こんな、素晴らしいお部屋の」

「じゃ、遅いしおやすみな？ カギは一応内から締めておいてくれ」

そうほぼ強引にマイを押して部屋に入れた。

マイはしばらくきよろきよろろ見渡し、

「……まさか、地上でこんな」

恐る恐るベッドに近づいて、縁に座った。感触を手で確かめるように押し出すと、

「ふかふかです——」

我慢できずに体をベッドに投げ出し、全てをまかせた。

こんな気持ちのよい寝具で寝れるのはいつ以来だろう、というような表情をしているように見えた。

「お休み……なさい」

12話 勇者、しるこエブリデイ。

「マイさん、本当お料理上手だよー」

「いえいえ、まだまだですよ」

「いや！ この肉じゃがとか最高っ！ こんな料理が毎日食べられるなんてっ」

「そう言っていただけで良かったです」

この移動式住居「TYANO—MA」に備え付けられたキッチンで女子二人がそんな風に立って和気あいあい、俺独りコタツで温まりながらその光景を見ている。

どうも俺だ、タケルだ。後日談というか、なんというか。

結果的な事を言えば、マイが同居することになった。

その経緯はまあ——少し面倒だけでも話していこう。

＊ ＊

「神主舞です、よろしくお願いします」

そうしてフローリングに正座をして頭を下げる彼女。

「改めて、俺は井上武な」

「え、えと……私は妹の井上桐……です」

俺の後ろについて隠れるように桐は自己紹介。

「大丈夫だって、マイは悪いヤツじゃないからさ」

「……うん」

妹は俺に対しては遠慮がないってのに、結構な人見知りだ。それも地上に出るのには向かない理由の一つでもあった。

「キリさん、私は神主舞さんに助けて頂きました」

「そ、そうなんだ」

「お兄様はお優しい方ですね」

「そ、それはない！　だって私のこと普通に置いて行くし、起こしてもなかなか起きてくれないし！　経験値もマックスの癖に――」

色々と俺に対する愚痴を言っていた、俺すぐ傍にいるんすけど。

「ふふ、そうなんですか」

「いやいや！　マイもそんな笑うなよ！？」

俺が生贄になったとはいえ、妹も前に出てきてるし。少しはマイのことを認めたのかもしれない。

そう思って顔に出しはしないが、心内でほっとした。

「お兄ちゃん、お腹減ったー」

「はいはい」

まあ俺たちってさ、兄妹仲良く料理ベタだったわけ。

だからほぼ毎日が栄養チューブ、味も申し分ないけど味気ないというかね。

そうやった二人チューブを冷蔵庫を取り出そうとしたら、一夜はということで泊ったマイが――

「おはよう、マイよく眠れたか？」

「おはようございます……はい夢心地でした」

まあ、あのベッドは地味に寝心地が凄まじい。恐らく中継地点とかだと固いアルミで作られた骨格に厚めの布団乗っただけだろうし、スプリングベッドなこちらとは寝心地は段違いだろう。

「あの……タケルさん」

「ん？」

「それは、なんですか？」

少し寝ぼけたような目をしながら俺の持つ栄養チューブを指した。

「朝食だけど」

「っ……これが朝食」

マイは驚いたように目を見開いた、完全に目覚めさせてしまったらしい。

「これでは見た目がよくないですっ！」

「え」

とりあえず妹とやってきたマイの分の栄養チューブを取り出そうとしていた時に、怒気を含んだかのような強いもの言いと言われたもんだから流石の俺はビクつとする。

「――冷凍庫、失礼してよろしいですか」
「あ、ああ」

冷凍庫にはテキストーに取れたり、買っておいた野菜や肉を保管していた。

実際作るのは俺たち兄弟は滅多になく、お茶の間に住む前は時折遭遇する友人に作って貰っていたりしていた。

「――これで、とりあえずは作れますね」

「え、はい？」

「――苦手なものはおありですか？」

「いや、俺はないな……妹はハウレンソウ」

「――分かりました、それでは誠に勝手ながら料理を作らせて頂きます。少々お待ちください」

「う、うん」

その行動は早いつてレベルじゃなかった、冷凍庫から食材を取り出して電子レンジを点けながら電子コンロの火を点けて――

まあ、彼女は料理を始められたのだ。俺もその様子に栄養チューブを引っこめるしかなく、その料理風景を観察させてもらうこと十分弱。

「――出来上がりました」

そうして俺とキリが呆然とする目の前のコタツの上に並べられたのは、まさに料理たち。

すげえ……肉野菜炒めとか久しぶりだ。ご飯とかも何時以来だろう。味噌汁とか懐かしすぎる。

そしてそれぞれの出来が素晴らしかった。

「これをマイが？」

「はい、勝手に冷凍庫の中身を使ってしまいすみません。でも、気になったもので。この食材費はいずれお返します」

「いや、それはいいんだけどさ」

「すごいね……お兄ちゃん」

「おったまげた」

本当に驚いていた。冷凍食材でここまで出来るとは、と。家事スキルゼロな俺から見たら神業同然。

「あと、タケル様」

マイがずっと俺の方へと滑らしたのは、茶色の少し湯気たつ粘性の高そうな液体の入ったお椀。

「これは……おしるこ？」

「はい。実はあれは私が自作したものを缶詰めしただけなんですよ？」

マジか、あのおしるこ市販モノじゃないどこかマイが作ったものなのか。

「た、食べちゃっていいのかな？」

「はい、キリ様どうぞ」

「お、おう……じゃあ頂くか」

そうして箸で野菜炒めを口に入れた、その途端に声がでた。

「「うまっ」」

兄妹シンクロ。

「この一見素朴な見た目だけでも、肉のダシが野菜の旨味を引き出してご飯にほどよい味の濃さで（以下略）」

まあ、要約してうめえ。

「ご飯も食べてみる……っ！」

「最初から気付いていたが、このご飯の艶は一体！？ 一粒一粒が宝石のように立ち、噛めば歯が丁度よすぎる固すぎず柔らかすぎずな弾力（以下略）」

これもうめえ！

そしてしるこうめえ！

「マイは料理が得意なのか？」

「得意というわけではありませんが、好きなんです」

おお、なんという家庭的な！

それで俺はしることを口に含んで、相変わらずなその味の深さ、そしてそれぞれの料理の達者さに思わず口走るわけで――

「俺に毎日しるこをつくってほしい」

と、いうことで彼女は入居決定。家政婦を雇用という感じで住んで貰うことになった、そしてマイはその他の家事も卒なくこなした。今までの栄養チューブの日々が嘘のよう。

＊ ＊

「タケル様、夕食が出来ました」

「お、今日は肉じゃがが」

マイの入居で食生活が大きな充実を見せた。いやあ、しるこ美味しい。

「お兄ちゃん、私はサラダ作ったよ！ このキャベツとキャベツの絶妙な重なり具合、どう？ 芸術的でしょ？」

「お、おう」

そう言う訳で、お茶の間の住人が一人増えたのだった。ちなみにサラダはえらく塩辛かった。

神主 舞、17歳女性。

勇者剣使い、使用武器日本刀「ナツメ」レベル23。

長い黒髪と黒い瞳を持つ和風美人で、料理などの家事に長けた家庭的な女性。

13話 勇者、は寝ています。／勇者、コタツ民を増やす。（前書き）

ゆるい二本立て

13話 勇者、は寝ています。／勇者、コタツ民を増やす。

朝、マイが入居してから数日。

結構にこのお茶の間にも馴染み始めたようだ。

「おはようございます、桐様」

「んー、おはよ」

「朝食前に温かいお茶はいかがですか？」

「んー」

キリの入った目の前、そのコタツの上にトンと湯のみが置かれた。

「ありがとうー」

「いえいえ、朝食は少し待って下さいね。もう少しでタケル様を起こしにいきましょうか？」

「うんー」

うおう、予想以上にすっげえ馴染んでる。

と思っているとキリが寝ぼけ眼で、携帯端末を取り出した。

「んー……てかここはどこら辺だろー」

とおぼつかない手つきで薄さ数ミリほどの液晶画面に触れる、すると位置情報を調べることが出来るナビアプリを起動。

「あ、砂漠地帯抜けたんだ」

画面に映し出されるのはこのお茶の間周辺の画像、そこにはかつての砂漠の肌色はなく緑地が広がっていた。

ちなみに移動式住居のコレは自動操縦なんで、基本的にはずっと勝手に走ってる。

前回の中継地点の際も少しずつ動いていたけども、スクーターが感知出来るよう設定されてるので大丈夫らしい。

一応補足しておくと、中継地点の周辺は荒野なんだけど一時間ほど走らせると一面砂漠地帯だったとのこと。

「ということは動物狩りも出来そうですね」

「へー、マイは動物狩りとかするんだ」

「……生きるためですから」

「切実だね……」

そう会話していると、そろそろ桐がコタツから這い出た。

「マイ、起こしにいこっか」

「そうですね、行きましょう」

と言って、何故かタケルの分だけは恒常的に女性陣に管理される鍵でタケルの部屋を開ける。
ノックをして。

「タケル様、もう朝ですよ」

「お兄ちゃん、朝だよー」

扉を開くと、

「ぐー」

寝てるね、うん。

「お兄ちゃん」

「タケル様」

「ぐうー」

二人はタケルをゆするものの起きる気配は一向になし。

「……お兄ちゃん」

「……タケル様」

「ぐうー」

それで女性陣は顔を見合わせて、少し微笑んでから。

「この世に満ちるモノよ我に力を授けたまえ”アン——」

「あら不思議、かつての包丁がこの通りの切れ味に”紙吹——」

二人が各々魔法と技をかけようとしたその時、

「(————殺気!?)」

勇者タケル、一応特訓でそんな殺気を感じ取れるようになっていたそう。

「(————でも寝たい、いや)」

いやいやいや！ 殺気って時点で殺しにかかってきてるのに、その判断は——

「”アン・ペティット・タイラント”っ」

「”紙吹雪”」

その時タケルの部屋をマイの繰り出した日本刀による旋風が、キリによる電撃が貫いた。
焦げたタケルの臭いも吹き荒れた風のおかげで薄くなったのにと？

＊ ＊

お茶の間にて。

何故か畳の居間の床に座布団一枚を引いて、タケルとキリがコタツに足を入れてのほほんとしているのをマイは眺めていた。

「そういえばタケル様、これはコタツですよね？」

「だよ？ てかマイはなんで足を入れないんだ？」

「いえ、知ってはいいたのですがこのような形態とは……そういえばタケル様は足を入れていましたね」

「ん？ いやそういうもんだろ、コタツって。マイも入ってみろよ」
「ですが……中で足がぶつかったりしませんか？」

そういうもんだよね。

「まあ無いわけじゃないけど」

「ですよ」

「だけど、一旦入ったら病みつきだぞ？」

「本当ですか——」

で、このありさま。

「はあー」

「ふう〜」

「はあ……」

お茶の間にて、三人はコタツに入っのんびりとした時間を過ごしてるようで。

「タケル様」

「んー？」

「このようなものは卑怯です……出れなくなってしまうではないですか」

効果テキメン？

「はああ、何もやる気でねー」

「ふうう。あ、お兄ちゃんオレンジ取って」

「はああ……緑茶が美味しいです」

あれ、この人たち勇者と魔法使いだね？

まあ冬場にコタツに入ったら出れないからね、半纏を羽織れば最強だけでも勇者や魔法使いとしては失格な気がする。

すると、マイが気付いたかのように顔をあげて。

「あ、そういえばタケル様。そろそろ食材が切れる頃です」

「そっかー……じゃあ手頃な町見つけて買いに行くか」

「私はお留守番するー」

「いや、そろそろ見習い卒業しろよ妹」

「やだー、面倒」

見習い卒業する気ないっすね。

「今のままじゃ魔法あれしか使えないじゃん」

「精度低いし、威力も制御できないけどいいじゃん」

「よくないじゃん」

「いいよ、お兄ちゃんいるし」

「……………ったく」

そう言われると怒るところかタケルはそっぽを向いて照れた、なんだこのブラコン。

「地味にお強い妹さんですね」

確かにね、チート勇者いいように使ってるんだから大したもんだ。

「タケル様、よろしければいいのですが……私を鍛えてもらえませんか？」

「おしるこ一杯で受けよう」

「ふふ、ありがとうございます」

馴染むねえ、そしてさりげなく。町に出かけるのとマイの鍛錬に付き合うことが決定したタケル。

お茶の間のせいか知らんけども緊張感の欠片もないなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6032q/>

お茶の間勇者。

2012年1月13日19時32分発行